ひ ろ ば

絶滅危惧「雑誌」の将来について

山田 弘明

（2010 年 4 月 17 日受理）

きちんと整理したものではないが、４月号の村瀬氏の呼びかけ [1] に応じて投稿したい。10 年以上個人会員として「物性研究」を購読しているものとして、雑誌の発行がなくなることがあるとすれば残念に思うので、率直な意見を言いたいと思う。

他の雑誌「数理科学」「物理学会誌」「固体物理」などと比べれば、「物性研究」はその形態と内容において個性的雑誌だと思う。まず、シンプルで地味な表紙だけでもその良さを感じる。

もちろん、比較的気楽に投稿できる点もいい。多少雑でも研究現場の生の声や息づかいが表現されやすいからだ。修士論文などが日本語で掲載される点にもそれは現れている。厳格に規定された頁数や、ややこしい referee がいないこと、オーソライズされた雰囲気が少ないことも気に入っている点だ。

次に、研究会報告も他の雑誌にない特徴的なものだ。最近の記事でいえば、山田耕作氏が「経済物理」の研究会にオブザーバー的に参加した折の様々なコメント [2] が掲載されていて興味深かった。主催者や発表者のややもすれば自画自賛になりがちな声と、別の角度からのコメントや批判は重要だと思う。これは他の雑誌ではあまりみられないのではなかろうか。

早川氏の現状報告 [3] によると、理論物理学刊行会の消滅が、現形態での「物性研究」の存続議論の契機になったということ、さらに、購読数の漸減が問題となっているようである。そこに書かれている収入状況から推察すると、現在の個人会員が約 100 人、機関会員は約 160 組というところであろうか。これについては、現時点のデータのみでなく推移を是非知りたいところであるが、個人会員の数の割合が予想以上に多いことに気づかされる。個人会員はかなりコアな「物性研究」ファンであろうことは想像できるが、機関会員の声や意見がどのようなものなのかが「物性研究」の将来に重要な要因であると思う。例えば、「公費で購入できないのなら購入しないのか」「公費ならば購読料が 2 倍になっても購入するか」などのアンケートをしてみるのも、今後の形態を探る上で有効ではなかろうか。こういった雑誌は、コミュニティでなく個人を中心に支えられるべきであると私は考えるのである。（当然このような調査では、機関会員の中の個々の研究者の声を訊くこ

とが重要である。）場合によっては、機関で購読を中止しても個人で購読を継続しようという人が増え、発行部数も伸びる可能性もあると思う。（ついでに言えば、編集委員も全員が個人会員としての購読をしてみてはどうか。数十万円規模の赤字にはかなり有効になる。）

早川氏は、電子版のみを発行する方向が現実的で、紙媒体は時代遅れと記しているが、はたしてそうであろうか。私は、紙媒体を離れての存続の意義には懐疑的になる。「物性研究」のあり方としては、紙媒体が主で、電子版は従であるべきだ、と思う。open access ジャーナルなどのように、電子版では自分の研究に直接関連する記事のみを読む傾向が強くなり、研究の細分化や効率化という方向に合致した事態を加速するのではないか。むしろ、open で自由な楽しい雰囲気が、ますます出せなくなるのではないか。私個人としては、電子版のみになるのであれば、現在一年間に使う研究費の２－３割を投じて購読している個人会員を止めることになると思う。

特に、大学等に所属していない場合、書店にも並ぶことのない紙媒体の「物性研究」は重要である。休刊後に無料のウェブ版のみで存続しても、早々に消えていくケースは一般誌ではよくあることだ。

より個性的な紙媒体の雑誌として、時代の流れに抗してたとえ隔月であっても残す方向の模索をしてもらいたいと思う。貴重な絶滅危惧種ならば、「時代の流れで」是非残したくもなるのではないか。そのためには、研究業績などにカウントされない、より open で自由な議論の場である雰囲気にする努力は必要である。

それにより、若い人ほど自由な気分で投稿でき、読むことができるのではないか。また、年配者にとっても、比較的活字が大きく行間も広く１頁内の情報量も適度で、読みやすい良い紙面だと思うが、褒めすぎであろうか。

[1] 村瀬 雅俊, 物性研究 vol. 94 no. 1 (2010/4), p. 1.
[2] 山田 耕作, 物性研究 vol. 93 no. 3 (2009/12), p. 357.
[3] 早川 尚男, 物性研究 vol. 93 no. 3 (2009/12), p. 231.